

平成30年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT30076 地域言語（方言）を自分たちの地域づくりに活かすプロジェクトを創ろう！



開催日：平成30年8月4日(土)
平成30年12月29日(土)

実施機関：十文字学園女子大学
(実施場所) (都城市未来創造ステーション)

実施代表者：松永 修一

(所属・職名) (文芸文化学科 教授)

受講生：中学生 3名 高校生 18名

関連URL：http://www.jumonji-u.ac.jp/news/2_5c107b5363ebc/index.h

【実施内容】

◎工夫した点

- ・生徒たちに積極的に考え参加してもらうために、グループ分けして対話の時間を多く設けた。また、ゼミ学生にファシリテーター役を担ってもらい、話しやすい環境をつくった。
- ・飲み物とお菓子の提供によるリラックスタイム
- ・コンピューターでの音声分析は、3台のコンピューターとプリンターを用意しアシスタントによるサポートによりオペレーションを簡易化
- ・ブレスト・アイデアシェア・マグネットテーブルなどのワークショップ手法を用いプロトタイピングしたものをプレゼン

◎スケジュール

(8/4)

- ・松永の自己紹介 ・サークルになったの参加者自己紹介、動機、関心シェア
- ・科研の説明、科学研究とは何か・人文科学の研究は何の役に立つのか
- ・言語研究の歴史、世界の言語研究と日本の言語研究の現在
- ・地域言語研究とは ・音声言語研究と科学 ・音声認識と自動翻訳、実験音声学
- ・方言を地域づくりに活かすプロトタイピング ・方言すごろくで遊びながら知る地域と方言
- ・子ども向けテレビ番組で方言を活かす
- ・プログラム参加後の感想シェア・事後アンケート

(12/29)

- ・松永の自己紹介 ・サークルになったの参加者自己紹介、動機、関心シェア
- ・荻原なつ子先生からパンフレットを用いて科学研究費についての説明。科学研究とは何か・人文科学の研究は何の役に立つのか、今から若い女性たちにとって何が必要ななどのレクチャー。
- ・言語研究の歴史、世界の言語研究と日本の言語研究の現在
- ・地域言語研究とは ・音声言語研究と科学 ・音声認識と自動翻訳、実験音声学
- ・方言すごろくで遊びながら知る地域と方言
- ・地域づくりとは？を考える

- ・100年後残しておきたいものとは
- ・方言を地域づくりに活かす事例紹介
- ・個々で地域づくりに方言を活かすアイデアをポストイットでのアイデア出し
- ・マグネットテーブル(関心のあるもの同士が同じグループになりアイデアを深める)
- ・プロトタイピング、具体的なプランをプロジェクトにする
- ・プレゼンタイムと評価
- ・プログラム参加後の感想シェア・事後アンケート

◎事務局との協力体制

- ・事前の打ち合わせ、募集上のサポート、当日使う掲示物の作成等細やかなサポートを得られた。また、事後の会計処理等多くの支援を頂いた。

◎安全確保

- ・水分確保の注意喚起と、飲み物用意を行なった。アシスタント共に避難経路確認をした。

◎今後の発展性・課題

- ・高校生の模試の日程と重なってしまったために予定していた2校の高校生の参加者が得られなかった。教育委員会から名義後援を頂いたが、それを活かせるよう、12月の実施に備える。
- ・生徒たちが立てたプランを実行できるプロジェクトとして行政や第三セクターのまちづくり会社とつなぎ、連携協力が生まれ実現可能性を高めた。
- ・プロジェクトの延長で実際に生徒たちとフィールドワークをする計画が生まれた。
- ・プロジェクト実現のための予算化のための協力を行なった。
- ・関心を持ってくれた生徒たちのネットワークから研究会的な要素の活動が生まれた。
- ・高校生の模試の日程と重なってしまったために予定していた生徒が参加できなかった。予定していた1校の高校生の参加者が得られなかった。教育委員会から名義後援を頂いたが、あまり活かすことが出来なかった。
- ・各学校の中の関心を持ってくれる先生とのつながりの開発の重要性を感じた。
- ・信頼関係の構築にも時間をかける必要がある。
- ・今回はNHK宮崎局の協力で本事業の取材を番組として放映してもらえたが、新聞の中でも特に地方紙からの取材を受けることが出来なかった。こちらも、地方記者とのつながりを前もって作っておく必要性を感じた。

【実施分担者】 なし

【実施協力者】 8/4 : 4名 12/29 : 3名

【事務担当者】 十文字学園女子大学 学術情報研究支援部 立神 安菜